



【藤澤みね】

【江戸から若松へ】

藤澤みね。右方にある写真の人の名前で、**轟木小學初代校長：藤澤茂助の妻**です。みねは明治初期から中期にかけて轟木村に住み、地元の子どもの育成に関わりました。

みねは元**幕臣**（江戸幕府の旗本や御家人等将軍直属の家臣）の娘として江戸で生まれました。後に会津藩士：藤澤茂助の妻となり、初めは江戸で、後に若松で暮しました。当時の会津藩は京都の**守護**でしたが、薩摩や長州等との戦い（戊辰戦争）で敗退します。その軍の中に茂助もいたのです。

【若松から北方へ百里の旅】

結局、会津は23万石から3万石の斗南藩となり、北方へ追われます。**みね**たち会津藩の家族は、若松から約500km北方にある五戸に向けて旅立ちます。みねは、二人の子ども（娘：シュン、長男：茂三郎）をつれて他の人たちと共に苦しい旅をします。その際に使用した【**つば釜**】と言われるめし炊き用の釜が残されています。真鍮製の直径35cmぐらいの釜で、旅の途中で使用したようです。（左下の写真）

【轟木村へ移住】

斗南藩は出来たての小藩で、ほとんどの藩士は無給。藤澤家は、野菜づくりなどでしのぐ苦しい生活をしていましたが、そのころ三戸郡轟木村の有力者：**鈴木清麓**から茂助が見込まれて学習塾の教師を依頼され、一家をあげて轟木村へ移住します。そのことにより、生活は少しよくなりました。

この学習塾は、制度が改正されて**轟木小學（第7大学区第17中学区）**となり、茂助は初代校長に、みねは、茂助を助けて子弟の教育に努めました。

【その後の藤澤家の暮らし】

藤澤茂助の努力もあり教育の実は上がりました。茂助の死（明治24年）の後みねは小学校と関わり、時には校長ともめたりしました。例えば、「かなづかい」について君田機久吉二代校長と論争しましたが、みねは気丈だけでなく、**学問も知性も備わった女性**でした。



その後みねの子どもたちも成長し、二男の四郎は菓子職人として立派に自立して百石に移り、みねも同行したようです。みねは、茂助と共に今でもおいらせ町の**法蓮寺**（旧百石町）に葬られています。

なお、四郎が開いた菓子店は、【藤澤製菓】として現在もおいらせ町で営業をしています。（社長は、四代目の茂登氏。小中野にも支店あり。）

⇒ **【会津から持参した釜】**

【参考】・「とどろき百年（市川地方概史）」（轟木小学校百周年記念誌） ・「続 はちのへ今昔」

【お話と資料】 **藤澤茂登氏**（おいらせ町・藤澤製菓） 【写真】 木村隆一

※【お知らせ】 誠に残念ですが、**奈良孝次郎先生**（八戸ペンクラブ会員）が「市川を調べる会」を退会することになりました。先生は平成17年の会設立から先月の第72回例会まで、8年余の長きに亘り会を指導すると共に、広報紙「市川を調べる」のために数多く執筆され、（会員の中で最高回数）調べる会を支えて下さいました。ありがとうございました。今後ともご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。【会長：星一郎・会員一同・市川公民館】（先生はご高齢ですがお元気です。）

